

# 教育委員会

## コラム Vol.22

### 教育長室の窓から

子どもへの対応…



令和8年度が始まり、子どもたちは進級・進学と新たなステージでの学校生活をスタートしました。

ところで、令和7年度の4月号では「小1プロブレム、中1ギャップ」について書かせていただきました。令和8年度は、スタートにあたり子どもの成長と対応について取り上げます。この話題は、私が校長の時に、以前勤務した福島大学附属小学校の先輩との話をもとにしています。

「最近の子どもたちは、大人と対等にふるまうことが当たり前になってはいないでしょうか。」もう15年以上も前の話ですが、現在も、保護者の皆さんに限らず、教職員も「子どもと友達関係であることは素晴らしい。」と感じている方が多いかと思います。その先輩は「経験も知識も力量もない子どもたちを同等に扱うことは、20歳（現在は18歳ですが）を過ぎて成人してから」と話していました。子どもたちは、学校や社会で様々なことを学び、経験し、一人前の人間に育っていきます。私たちは、それを支援したり援助したり指導したりして、育てていくことが大切であると思います。

私の子育てや教員としての経験から、子どもは初めは親の言うことは、何でも聞かなければならないと思っています。そのうち、様々な経験や知識をを獲得し、思春期にもなると、親の言うことに疑問を感じるようになり、親から離れるようになります。しかし、より一層の経験や知識を獲得したり社会経験を積むと、一時反発したことは間違っていることに気付きはじめ、また親のところに帰ってきます。

新年度のスタートにあたり、子どもへの接し方について、私たち大人が考える機会になればと思い取り上げました。

教育長の

ちょっといい話

### 信頼関係を築く大切さ

～高山看護学校閉校記念誌より卒業生の言葉一部抜粋～



「手伝って」と言われた時、全てを手伝うことが患者の援助になるわけではないのだと思いました。患者は、「歩けるようになりたい。」という意志があり、そのためにはどうすべきかを考え、援助することが患者の自立に繋がると思いました。性格や特徴を理解し、その人にあった援助をすることの大切さ、そのためには信頼関係が大切であると考えています。

これは、高山看護学校の卒業生の言葉です。（一部加除修正）実習を通して、子どもたち（学生）は、准看護師としての知識や技術のみならず、疾病を持った方々の考え、人格などを尊重し、温かみのある、心に届く看護の基礎能力を身に付け、多くの卒業生が医療現場に羽ばたきました。そのような高山看護学校が閉校となりましたが、医療人として社会人としてますますの活躍を祈るばかりです。

また、この言葉は、子どもたちの学校生活、そして私たちの日常生活にとっても大切であると思います。

